

剣道における二刀使用時有効打突判定の事例的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 守屋, 匡人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36047

剣道における二刀使用時有効打突判定の事例的研究

スポーツ科学課程 00-227 守屋匡人

I はじめに

剣道試合における審判員の重要な役割は、有効打突の判定と反則の判定である。剣道試合・審判規則の17条には、『有効打突は、充実した気勢、適法な姿勢を持って、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとする』とされている。いずれの条件も抽象的であり、剣道競技において有効打突判定は、主観的価値裁量の幅が大きいものである。平成4年に全日本学生剣道連盟が試合における二刀の使用を解禁して以来、学生剣道界では少なからず二刀の剣士が試合を行ってきた。しかし、二刀に関する研究は少なく、ましてや二刀使用における有効打突判定に関する研究は皆無であると言える。本田らの研究報告によると、一刀使用の試合において多くの審判上問題点が確認されている。一刀よりも認知度の低い二刀を使用した試合においては更に多くの審判上問題点があることが予想されるのではないだろうか。そこで本研究は、剣道における二刀使用時有効打突判定について判定が難しいと思われる打突場面をVTRに収録し、その打突場面の有効打突判定にどれほどの差異が生じるかを明らかにするとともに、その場面を分析、検討することにより二刀使用時の有効打突の実態を明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

1 検討資料の収集

本研究で対象とした場面は、審判員が二刀使用時有効打突の判定において難しいと思われる場面を取り上げ、打突部位がよく見える方向にカメラを設置し収録した。試技回数は13場面42試技とした。

2 試合者（モデル）

大学剣道部に所属する二刀使用者（試合者A）と一刀使用者（試合者B）の男子2名を選出した。なお、試合者Aの特性は年齢21歳、身長180.0cm、体重72.0kg、剣道経験年数12年、剣道段位3段である。試合者Bの特性は年齢21歳、身長174.0cm、体重70.0kg、剣道経験年数14年、剣道段位4段である

3 判定用ビデオの作成（ビデオ編集）

収録された有効打突判定において判定が難しいと考えられる13場面、計42試技の中からさらに厳選し、8場面、計22試技を採用、編集し、実験用ビデオテープを作成した。

4 判定者（審判員）

週4回、二時間の稽古を行っているK大学剣道部員27名を審判員とした。内、22名は一刀使用者群、5名は二刀使用者群である。平均剣道段位は 2.4 ± 0.7 8段、平均年齢は 20.6 ± 1.6 4歳、平均剣道経験年数は 10.7 ± 3.8 1年である。また、比較対象として、剣道の大会の最高峰である全日本剣道選手権に、二刀を使用しての出場経験を持ち、平成3年に日本体育大学で行われた全日本学生剣道指導者講習会「二刀の指導・審判法につ

いて」において講師の経験のある審判員Eを審判員とした。

5 判定方法

審判員の前方にTVモニターを設置し、審判員はTVモニターに映し出されるあらかじめ編集した実験用ビデオテープの22試技を見て判定する。審判員の判定項目は、有効打突である・有効打突でない・分からない(棄権)の3項目とした。審判員には、各試技の映像を約30秒間隔で見せ、各試技を見た後で、直ちに判定し調査用紙に記入するという方法で行った。各試技の映像は1度しか見ることはできない。

6 内省報告の収集

打突判定終了後、審判員に本実験及び打突判定についての感想を自由回答法により求めた。回答での意味内容の確認以外の質問や回答の強制は行わなかった。これらの内省報告は、資料を用いた。

7 解析方法

審判員の有効打突判定において、どれだけの差異が生じるかについて検討するために、全体、一刀使用者群、二刀使用者群をカイ2乗検定により有意差検定を行った。なお、わからない(棄権)の判定については、有効である、有効でないのどちらに含むべきか判断できないため検定上取り除いた。

III 結果

ここでは、全試技を取り上げることができないため、場面2(試技2-1, 2-2, 2-3, 2-4)を取り上げる。

試技2-1(写真1)、2-2(写真2)、2-3(写真3)、2-4(写真4)は、近い間合いから小刀によって正面打突した場面である。なお、それぞれの試技は体の使い方や残心が異なっており、試技2-1・2-2は残心時の体の移動距離が大きく、試技2-3・2-4は試技2-1・2-2に比べ残心時の体の移動距離が小さい場面である。



打突時 残心時

写真1



打突時 残心時

写真2



打突時 残心時

写真3



打突時 残心時

写真4

試技2-1, 2-2, 2-3, 2-4の判定結果は図1, 図2, 図3, 図4にそれぞれ示す。

試技2-1, 2-4は全体、一刀使用者群、二刀使用者群ともに優位な差は認めらず、試技2-2, 2-3は全体では有意差があると判定できたが、一刀使用者群、二刀使用者群では優位な差は認められなかった。審判員Eは試技2-1, 2-3, 2-4を有効である、試技2-2を有効でないと判定した。

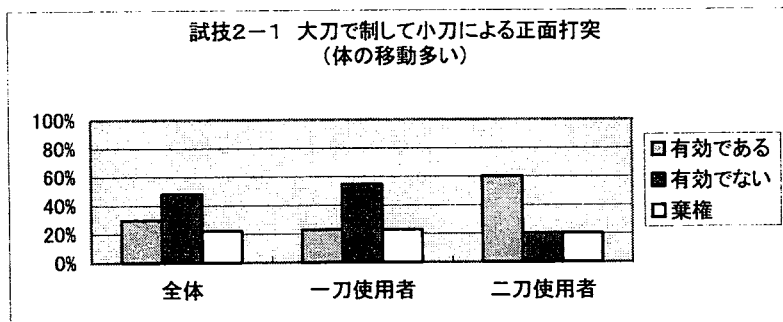


図1：試技2-1

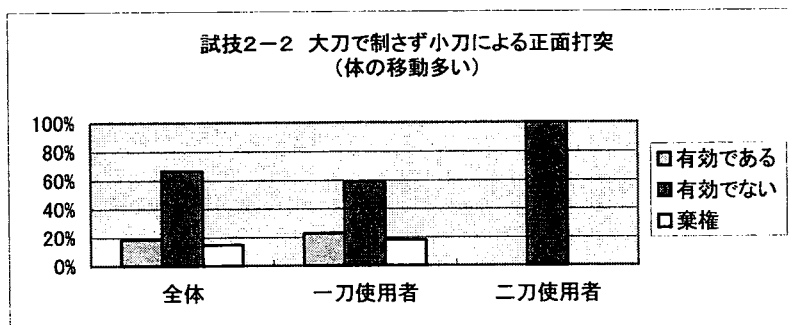


図2：試技2-2

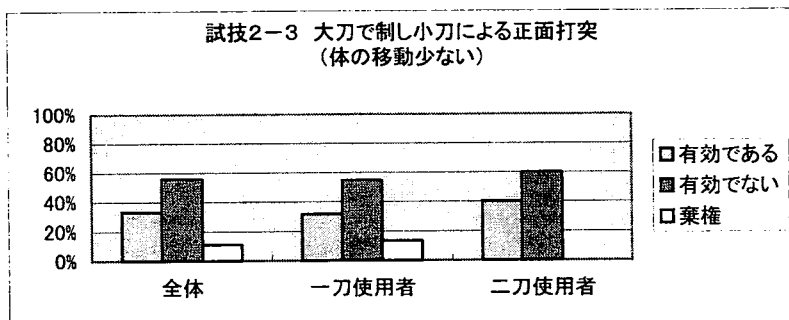


図3：試技2-3

試技2-4 大刀で制し小刀による正面打突
(体の移動少ない)

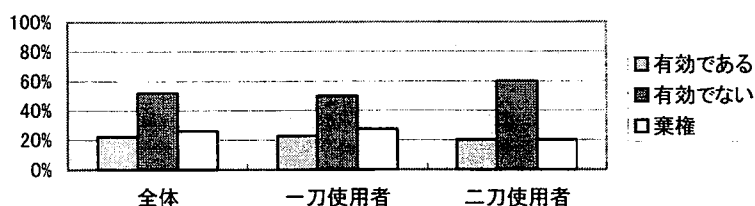


図4：試技2-4

IV 考察

試技2-2・2-3の全体については有意な差が認められたが、試技2-1・2-4は全体、一刀使用者群、二刀使用者群ともに有意な差は認められず、有効でない、棄権と判定するものが多い傾向がみられた。全体的に小刀での打突は有効でないと判定する傾向にあり、小刀での打突の判定基準については十分な理解がなされていないと推察される。審判員Eが試技2-2について「打突が軽い」との理由で有効でないと判定し、それ以外は有効であると判定したことから、小刀での打突も有効打突に判定するべきであると考えられる。ここでポイントとなるのが打撃力であり、二刀での打突は片手でおこなうため、大刀による打撃であっても打撃力が弱いと判断されやすい。小刀の打突は大刀に比べても見た目にも打撃力が弱く感じるため、小刀の打突は大刀の打突以上に確実であることが求められると推察される。また、二刀使用者群は一刀使用者群に比べ、小刀の打突を有効であると判定する傾向にあることから、二刀の使用経験が判定に影響を及ぼすことが推察される。

V まとめ

本研究は、剣道における二刀使用時の有効打突判定において、判定が難しい場面を取りあげ、審判員に判定を求めたが、全ての試技において判定が一致することがなく、二刀の有効打突判定は一刀以上に困難であり判定基準が知られていないということがわかった。さらに、今回取りあげた場面は二刀での多様な技の中のほんの一部であり、まだまだ多くの判定困難な場面があると予想され、今後さらなる調査が望まれる。また、今回の調査は、二刀使用者が少ないという現状から、二刀使用者群の審判員人数が少なかつたため、二刀使用者群内の有意差検定において不明瞭な点があった。次回は、二刀使用者群、全体ともに多くの審判員を対象とすることが今後の課題であると考えられる。

二刀使用解禁から約10年が経ち、確実に二刀使用者は増加の兆しにあると考えられる。二刀が、日本古来から伝わる剣道のひとつのスタイルとして、正しいかたちで更なる発展・普及を成し遂げる為にも、今後、二刀使用時の審判技術の向上だけでなく、二刀に関する更なる研究が求められる。